

『枕草子』論 — 逸脱と創造の方法 —

小 沢 菜 絵

「春はあけぼの」、この有名な冒頭文から始まる『枕草子』は、光と笑い、日常のささやかなときめきに包まれている。しかし、実際には清少納言が仕えた定子のその一族、中関白家の凋落という闇の中から生み出されたものであった。本稿ではそのような背景のなかで、『枕草子』が目指した作品のあり方や作品に込められた思いを、初段（随想的章段）、類聚的章段、「郭公探訪」の段（日記的章段）、跋文等を通して逸脱と創造に焦点をあてて考察していきたい。

本文は『新編日本古典文学全集』を使用し、章段の三分類については、以下から類想段（＝類聚的章段）、随想段（＝随想的章段）、回想段（＝日記的章段）と記す。（注1）

一 初段「春はあけぼの」の考察

初段には春、夏、秋、冬と、四季の移ろいが順に書かれている。これは四季の各巻を最初に置く『古今和歌集』の構成に倣っていると考えられる。（注2）『古今和歌集』をはじめとする勅撰和歌集の部

立が、四季折々の美しさを詠じた各巻から始まるのは、天皇や上皇の命によって編纂され奏覧する書物として、四季が穏やかに移ろい自然が美しい平穏な世界を讃えることが、その世界を統べる天皇とその御代を讃えることにつながるからである。これと同様に、『枕草子』は定子から執筆の命を受け定子に献上する特別な作品として、定子の存在や定子の生きる世界を讃えているのだと考える。勅撰和歌集がその時代の高度な文化を体現したものであるように、『枕草子』もまた、文化の最先端を目指した定子サロン文化の書として、勅撰集をつくるような意気込みを持って執筆されたのではないだろうか。

また、初段には全ての季節に天象がちりばめられており、「天象部」から始まる中国の類書の構成も取り入れられていると見る見方もある。（注3）和歌だけでなく漢籍の知識も備えた定子サロンの文化の書として、和漢の融合という方法がとられているのだ。『枕草子』は仮名散文という形式を選んだことによって、四季を最初に書く国風方式か、天象を最初に書く漢風方式かの二者択一ではなく、どちらも含みどちらからも自由な作品であることができたのである。

『枕草子』は「春はあけぼの」という、当時の絶対的な美的価値観であった「春と言えば花」という常識を裏切る革新的な一文から始まる。とは言え、春とあけぼのが異様な組み合わせかというところとも言えない。『古今和歌集』の伝統的美意識には、「春・朝・花」の組み合わせが多々見られるからだ。しかし、「あけぼの」という言葉は『枕草子』以前では用例が少なく、特に春とあけぼのの組み合わせは調べた限り見つけられなかった。

そこで、『枕草子』以前で「あけぼの」という言葉が使われている作品を調べると、『日本書紀』、『蜻蛉日記』、『うつほ物語』、『順集』に用例が見られたが、単なる時間帯としての記述もしくは季節が夏や不明であることから、「あけぼの」が美的価値を持つものとして認識されてはおらず、春とあけぼのの組み合わせに関しても典型的なものではなかったことがわかる。ところが、『枕草子』以後になると「あけぼの」の用例が、『源氏物語』に十四例（このうち三例が「春のあけぼの」という表現を用いている）、『後拾遺和歌集』に一例、『新古今和歌集』に十四例（このうち春歌に属しているものが六例、「春のあけぼの」という表現を用いているものが五例）、他作品でも数例見られるなど急激に増える。このことから、「春はあけぼの」という冒頭の一文が伝統的な美的価値観に新風を吹き込み、「あけぼの」や春とあけぼのの組み合わせが、美的価値のあるものとして認められ始めたと言いうことができる。『枕草子』は「春・朝・花」という『古今和歌集』的

伝統を受け継ぎ認めつつも、そこに盲従しない作品の姿勢を冒頭で高らかに宣言しているのである。

また、この「春はあけぼの」について、「あけぼの」とは暁が終わり夜がほのぼのと明けはじめ、日の出もしくはその直前の時間帯を指す。ここでは単に朝ではなく、その中のあけぼのという暗い夜が明け太陽が昇り始める一瞬の時間が切り取られている。それは、中関白家凋落によってあらゆる苦難を経験し、暗闇の中にいる定子に捧げる希望の表現なのである。ただし、政治的状况はそれほど甘くはない。それでも、初段や二段「正月一日は」で各季節の美しさや面白さ、人の営みの尊さを描き、初段に続く二段「ころは」では「すべてをりにつけつつ、一年ながらをかし」と言い切る。これらは、生きる希望すら失うような状況にある定子に向けての生きることの賛歌なのである。

同じく春の条には「紫だちたる雲」が書かれている。これは聖代に現れるという紫雲を意味するという。繰り返しになるが、勅撰集は編纂を命じた天皇の御代の文化度の高さを示すためにつくられる。『枕草子』は定子に執筆を託され、定子がつくりあげた文化を記し、定子に捧げる書として勅撰集をつくるかのような意気込みを持って執筆された。つまり、清少納言にとつての勅撰集にも等しい『枕草子』を執筆するにあたっては、世界の統治者は定子であり、本稿ではこれを重視する。一条朝の否定ではないことは予め断っておくが、「紫だちたる雲」の聖代観に関しては、

あえて定子一人もしくは定子に焦点をあてて捉えたい。初段に描かれた紫雲は、まさに定子に捧げる書の冒頭としてふさわしいものなのである。また、仏教では阿弥陀仏が紫雲に乗って来迎すると言われていることから、吉兆を表す瑞雲である。初段の執筆を定子崩御後と仮定した場合には、仏教の紫雲という読みも可能になるだろう。さらに、和歌ではこの頃から紫雲に天皇の后を重ね合わせる歌が詠まれ始めていることから、まさに定子その人を表しているとも考えられる。「紫だちたる雲」は、これらの意味を重層的に含んだ表現なのである。「あけぼの」そして「紫だちたる雲」はどちらも、定子そして定子の生きる世界を言祝ぐ象徴的な意味を持っているのである。

初段は冬の条の「昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし」で締めくくられている。作品の冒頭を飾る初段において「わろし」という否定的評価が下されていることについて、通常反みやび的なものや美しくないものは徹底的に排除されてもおかしくないが、『枕草子』では否定的評価を下しつつも排除し無視することをしない。そのようなものを取り上げ書くのは、この世界がそれらを含めて成り立っているからである。みやびなものや美しいものだけではないこの世界を肯定することで、定子の生きる世界を上辺だけでなくまるごと肯定しているのである。これは凋落という苦難を背負うことで獲得した視座であり、そういった世界だからこそ愛しく、全てがかかけ

えないものなのだという思いが込められているのである。

二 類想段における逸脱と創造

『古今和歌集』は当時の仮名文学作品の最高峰として君臨し、その美的価値観は王朝貴族達の絶対的な規範となっていたことから、『枕草子』にとつて越えるべき壁として意識されている。ただし、『枕草子』は『古今和歌集』を意識しつつも、そこからの逸脱こそが大きな特徴である。逸脱は類想段において特に顕著なのであるが、例を挙げる前に類想段（いや作品全体と言っても良いかもしれない）の基盤となる言語意識を端的に表している一四八段「見るにことなる事なきものの、文字に書いてことごとしきもの」を取り上げる。

見るにことなる事なきものの、文字に書いてことごとしきもの
 覆盆子。鴨頭草。水茨。蜘蛛。胡桃。文章博士。得業の生。皇太后宮権大夫。楊梅。いたどりはまいて、虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顔つきを。

一四八段には、見た目には格別なことがないもので、文字に書くど仰々しいものとして、覆盆子や鴨頭草などが挙げられている。

清少納言は、ある言葉それ自体とは別に、その言葉から喚起されるイメージが持つ世界があることを理解した上で積極的に導入している。これは、和歌において枕詞や縁語などが持つイメージを共通基盤とし、言葉の効果を最大限に活用していた平安貴族達にとつての常識でもあった。類想段はこの常識を利用することで、逆に常識を崩そうとしているのである。

さて、『古今和歌集』意識と逸脱の姿勢が顕著な類想段において特にそうした傾向にあるのが、「は」型章段とりわけ地理的章段である。地理的章段の筆頭である「一段」「山は」を取り上げる。

山は 小倉山。鹿背山。三笠山。このくれ山。いりたちの山。わすれずの山。末の松山。かたさり山こそ、いかならむとをかしけれ。いつはた山。かへる山。のち瀬の山。あさくら山、よそに見るぞをかしき。おほひれ山もをかし。臨時の祭の舞人などの思ひ出でらるるなべし。

三輪の山、をかし。手向山。まぢかね山。たまさか山。耳なし山。

一段には全部で十八の山の名が挙げられている。その中の「小倉山」、「三笠山」、「末の松山」、「かへる山」、「三輪の山」は、歌枕として多くの歌に詠み込まれている。しかしその反面、歌枕として有名な「吉野山」や「立田山」は挙げられておらず、所在未詳

の山も多い。当時の行動範囲の限られていた女性にとつて、地理的章段に挙げられている全ての場所に行くことは不可能に近い。実際に見ることのできない地に対する知識は、その地まつわる伝説や和歌説話、その地が詠み込まれた和歌のイメージに頼るしかなかった。このように、和歌的世界を主軸に据えたテーマに設定されていることから『枕草子』を歌枕の書とする見方があるが、和歌の世界を主軸に据えるのは、目的ではなく手段であると考えられている。もちろん歌枕の書との関係は否定しない。むしろ、類想段は歌枕の書の形式を意識的に導入しているようにも思う。

では、これら十八の山はどのような基準によつて選択・配列されているのかというと、和歌を媒介として連想され挙げられているという。例えば、一段は有名な歌枕でもある「小倉山」から始まる。「小倉山」が詠み込まれた和歌に、『古今和歌集』紀貫之の「夕月夜をぐらの山に鳴く鹿の声のうちにや秋は暮るらむ」（巻五秋歌下312）や、同じく貫之の「小倉山峰立ちならし鳴く鹿の経にけむ秋を知る人ぞなき」（巻十物名439）がある。小倉山の鹿は歌によく詠まれ、「鹿」から連想して、二番目の「鹿背山」につながるという。「鹿背山」が詠み込まれた和歌には、『古今和歌集』読人知らずの「都出でて今日みかの原泉川風寒し衣かせ山」（巻九羈旅歌408）がある。鹿背山はみかの原と相対しており、この歌の「みかの原」の「みか」が、三番目の「三笠山」につながる。また、『万葉集』田辺福麻呂の「鹿背の山木立を茂み朝さらず来

鳴き響もす鶯の声」(巻六1057)の「木立を茂み」から、言語遊戯的に「傘」、「笠」を連想する昼夜暗い三笠山が連想されているという。三笠山の山頂浮雲峰は、七六八年に春日大社の祭神である武甕槌命が藤原氏によって勧請され、白鹿に乗って降り立った場所とされており、これも鹿から三笠山の連想ができる要因となるかもしれない。以降は省略するが、このように一段は和歌に詠むべき有名な歌枕の列挙ではない。歌枕の書の形式や、「山は」という題を持つ和歌のイメージを逆手にとつて、和歌に詠むべき歌枕を書くという和歌の常識から逸脱し、歌枕の書とは違った意識で選択と配列がなされている。小倉山、鹿背山といった言葉それ自体だけではなく、それらの言葉が持つ和歌や伝説などの世界性を取り込みながら、連想や言語遊戯などを通して言葉の持つ可能性を追求し、伝統と創造を融合させることで、これまでにない形の作品として提示しているのである。

それは「もの」型章段においても同様である。「もの」型章段の冒頭に提示された主題について挙げられた各項目には、大なり小なり差が生じている。例として、一〇三段「はるかなるもの」を取り上げる。

はるかなるもの 半臂の緒ひねる。陸奥国へ行く人、逢坂
越ゆるほど。生まれたるちごの、大人になるほど。

「はるかなるもの」という言葉で一括りにするには、最初の「半臂の緒ひねる」と最後の「生まれたるちごの、大人になるほど」では明らかに次元が違う。この「半臂の緒ひねる」から「生まれたるちごの、大人になるほど」までを包含する「はるかなるもの」という言葉が持つ世界の広さ、すなわち可能性によって、「はるかなるもの」の本質が探られているのである。つまり、単なる清少納言の考える「：なものの」列挙という域を超え、主題の言葉から喚起されるイメージと、挙げられた各項目から喚起されるイメージに導かれて現れてくる「はるかなるもの」とは何か」という主題の問いに思いをめぐらせる仕組みになっているのである。^(注5)

以上、類想段は使い古された和歌や言葉、日常にあふれる何気ないものや感情の数々に向き合い、思いをめぐらすことで、それを新鮮な輝きを持つものとして蘇らせている。日常の些細なもののかに感動を発見することは、生きることの賛歌でもあるのだ。

三 回想段「郭公探訪」における逸脱と創造

『枕草子』の逸脱の姿勢は、和歌的世界の固定観念だけにとどまらない。あらゆる物事に対する固定観念に対しても同様である。

次に、九五段「五月の御精進のほど」を取り上げ、回想段の逸脱と創造について考察する。

九五段は、中関白家没落期にあたる長徳四年（九九八）の出来事である。清少納言ら女房四人が定子の許しを得て、郭公の歌を詠むという使命のもと山里に出かける。山里に郭公の声を聞きに行くという行為は、当時男性歌人を中心に行われ始めており、清少納言らの郭公探訪も、そのような風流行事を積極的に取り入れた定子サロンの看板を背負ったものであったと考えられる。回想段の中でもとりわけ和歌の色合いの濃い章段であるが、意図的に和歌的規範をゆきふろうとする姿勢が読み取れる。また、郭公探訪が男性の行事であったことも看過できない。ここには、男性／女性という二項対立にとられない、ジェンダー越境への挑戦の姿勢を読み取ることができる^(注10)。

さて、九五段には五月雨と卯の花が書かれている。これらは郭公とともに夏の代表的景物であり、郭公と合わせて歌に詠まれることも多い。しかし、九五段に書かれた五月雨と卯の花は、郭公の歌を詠む契機になるどころか、かえって詠歌の機会を妨げる。また、和歌の世界では卯の花は「憂し」、五月雨は「心も晴れず物思いに耽る心情」を導く例が多いのであるが、ここではそのような暗い心情に取って代わるように、楽しさや笑いが導かれている。そして目当ての郭公の声よりも、田舎風な農作業の様子や食事の物珍しさといった反みやび的要素に夢中になり、肝心の郭公

の歌は詠めずに終わるのである。郭公の歌を詠めず、定子の書いた「下蔵こそ恋しかりけれ」の下の句に、「郭公たづねて聞きし声よりも」という上の句をつけるこのエピソードは、郭公の声を聞きに行くという風流な行為が下蔵に圧倒されることで、和歌的規範を問い直している。同時に、歌があつてしかるべきという固定観念をも壊そうとしているのである。

当時の風流を意識し、歌詠みを目的とした郭公探訪の答えが、歌を詠まないという選択だった。定子に詠歌免除を願い出たのは、歌人の家に生まれたことによる和歌への劣等意識という、清少納言の発言通りの意味もあるかもしれない。しかし、この詠歌拒否は清少納言個人の問題だけに収まるものではなく、定子に仕える女房として、そして執筆姿勢に関わる問題として、あえて歌を詠まないという元輔の娘という立場を逆手に取った戦略なのではないかと考える。ありきたりの郭公の歌を詠むよりはいつそ差別化をはかったのだ。歌人の娘が歌を詠まず、和歌的固定観念に盲従しないことで話題性を生み、衰退してもなおお文化の最先端にいる定子サロンの存在感を示し、盛り立てようとする意図が働いているのではないだろうか。歌を詠まなかったもう一つの理由として、歌のために形骸化してしまった郭公よりも、自らの感性や体験によって感じた面白さ美しさに心惹かれ、そこに価値を見出したからではないかと考える。清少納言の郭公好きは『枕草子』の随所に見られ、郭公の否定ではないことは明らかである。そう

であるからこそ、自らの感性や体験によって価値を見出した面白さや美しさに蓋をし、郭公の歌を詠まなくてはならないという固定観念にとらわれたまま形骸化した郭公に型通りの賛美をするとは、清少納言の望む郭公賛美ではないはずであるし、そうして詠まれた歌には露ほどの価値もない。この段は郭公の歌を詠めなかつた失敗談として解されることも少なくないが、空虚な歌を詠むことのほうがよほど失敗であると言える。ここでは明確な意図をもって郭公が切り捨てられているのである。『枕草子』は単なる歌物語や歌枕の書になることを拒んでいる。歌という主役のために物事が存在し、文が書かれるのではなく、どんなに些細な物事でも、それ自体が価値あるものとして書かれ、また散文そのものにも価値を持たせようとしているのである。清少納言の歌を詠むまいとする姿勢に最初は不興げな様子を見せていた定子も、下蔵の味の話には「思ひ出づる事のさまよ」と笑い、「下蔵こそ恋しかりけれ」という下の句を書く。ここには、みやびの世界からの逸脱という大胆な試みさえも認めて笑う定子の姿が描かれている。この章段からは、定子に導かれるばかりであった宮仕え初期から、自ら主体的に定子サロン文化を牽引していくようになった清少納言と、それを承認し評価する定子という構造への変化を読み取ることができよう。

また、いわゆる後期章段の特徴として、下衆の登場が挙げられる。八三段「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」には常陸

の介という下衆が登場し、「むげに仲よくなりて、よろづの事語る」と交流があったことを示す。下衆に対する軽蔑の態度は一貫しているものの、本質的には何も変わらないのに、政治的狀況によって立場が大きく変わってしまった王家の人達を見てきたからこそ、簡単には無視できない存在として視界に入り込んでくるようになったのである。王朝のみやびに盲目であった宮仕え初期とは違い、中閨白家の凋落後はこれまでみやびの対象外として排除してきたものにも目を向けるようになるなど、あらゆる物事への捉え直しの姿勢がうかがえる。この捉え直しの姿勢こそが、固定化された価値観や規範にとらわれず、新たな価値観を発見し創造していくという『枕草子』の新しい道を開いたのだと考える。そしてそれを、規範があり決まった型に収める和歌ではなく、むしろ規範や型を打破すべく自由な散文というかたちで表現することを選び、あらゆる固定的価値観を超えた全く新しい作品を創ろうとしているのである。

四 跋文の構造と源経房について

跋文は『枕草子』という作品の執筆契機や内容、世間の評価、流布に至った事情が述べられた重要な意味を持つ章段である。しかし「公的要素と私的要素」や「事実と虚構」など、二つの相反

するものが混在し矛盾していることから複雑かつ不明瞭な章段でもある。

まず「公的要素と私的要素」の混在について見ていく。第一段落には「人やは見むと思ひて」や「心よりほかにこそ洩り出でにけれ」、第三段落には「ただ、人に見えけむぞねたき」など、人が見るはずのない私的な作品であるかのように書かれている。その一方で、第二段落では執筆の契機を定子からの紙の下賜としている。第二段落が事実であるならば、その紙には「枕」なるものを書き、書き上げた作品は定子に献上しなければならぬはずで、私的なものにはなり得ない。このように、定子からの執筆の命を受けた公的性格を持つ作品であることと、私的性格を持つ作品であることが矛盾しているのである。

次に「事実と虚構」の混在について、第四段落では来訪した経房に畳を勧める際、その上に載っていた草子に気付かず一緒に出してしまったとある。これは事実として受け取り難く、清少納言が偶然を装い意図的に草子を出したのだとする見方が強い。ただし、このいかにも意図的な行為が事実か否かはわからない。それよりも、作者が読者に虚構とわかるようわざと仕組んでいるのだと考えたい。『枕草子』が必ずしも事実のみを記した作品ではないことをふまえると、跋文があとがきゆえに書かれていることが全て事実だと思ひ込むのではなく、あとがきという形を取りながらも仕掛けが隠された一章段として捉えるべきだろう。「公的要素

素と私的要素」や「事実と虚構」など二つの相反するものを混在させることで、二者択一の常識を壊そうとしているのである。相反するものが混ざり合い、対立構造を超えていくようなところに、常識の打破そして逸脱という『枕草子』の本質にもつながる姿勢がうかがえるのである。

すでに論じられているように、二五九段「御前にて人々とも、また物仰せらるるついでなどに」は、跋文と深く関わっていると考えられる。同僚女房達から道長方に内通しているとの疑惑を受け里に引きこもっていた清少納言のもとに定子から「めでたき紙、二十」と「高麗縁の畳」が贈られる。「紙」と「畳」は跋文にも登場しており、「両段に象徴的な言葉として書かれている。二五九段の前半には、かつて清少納言が定子の御前で「どんなに生きるのがわずらわしいときでも、上等の筆や白い紙、陸奥紙が手に入ると、また高麗縁の畳を見ると、心が晴れてやはりしばらく生きていたいと思うのです」と語ったことが書かれている。そのときのことを定子は覚えており、辛い思いをしているであろう清少納言に紙と畳を贈った。定子の心遣いに感動した清少納言は、この紙を草子に仕立てたという。おそらくこのときに『枕草子』の本格的な執筆が始まった。それが跋文第一段落の「つれづれなる里居のほどに、書きあつめたるを」であると考えられる。また、「めでたき紙、二十」と、あえて「二十」という数を記すことにも

注目したい。この「二十」という数は、『古今和歌集』の巻数が二十巻であることを意識してのものだと考えられ、ここにも『枕草子』の『古今和歌集』意識がうかがえる。次に、贈られた畳にも注目すると、跋文では清少納言は草子を畳に載せて経房に出している。二五九段の末尾には、清少納言がお札の文を書いて定子の御前の高欄に置かせようとしたところ、使いの者が御階の下に落として紛失してしまったと書かれている。『新編日本古典文学全集』が「書いたものが失せた」という記述は、執筆とかかわって述べられることが多い」と指摘しているように、これも文学作品にありがちな謙辞と思われるが、時期的にも私は二五九段で落としたという手紙が、跋文第四段落で畳に載せて経房に出した『枕草子』なのではないかと考えている。跋文で草子を誤って畳に載せて差し出してしまったという記述と、二五九段の文を落としてしまったという記述が内容だけでなく、「…ものは…けり」、「まどひ」という表現まで類似しているからである。

・「端の方なりし畳をきし出でしものは、この草子載りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして…」（跋文）

・「文を書きて、またみそかに御前の高欄に置かせしものは、まどひけるほどに、やがてかけ落して、御階の下に落ちにけり。」（二五九段）

定子に献上するべきはずのものを、まず定子に見せることをせざ、対立する道長に近しい経房に渡したという跋文の記述から、道長方への転身を疑う説がある。しかし、二五九段と跋文を読み重ねることで、定子から執筆を託され下賜された紙（跋文）、再び贈られた紙（二五九段）に書いた作品を定子に届けようとし（二五九段）、定子から贈られた畳（二五九段）に載せて経房に出した（跋文）という読みが可能になる。つまり、『枕草子』は経房によって定子のもとに届けられたことを暗に示しているのだ。

経房についてさらに考察を進める。経房は道長の第二夫人明子の実弟であり、道長が後見を務めていた。このことから経房が道長に近しい人物であることは言うまでもない。そうでありながら、八〇段「里にまかでたるに」では、里居中の清少納言の所在を知る数少ない人物として書かれ、一三七段「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来」では、里居中の清少納言に定子方の様子を伝え出仕を勧めている。そして跋文には、『枕草子』が経房によつて世に広まったことが書かれている。道長方でありながら、定子方の清少納言ともつながりを持つことについては、安和二年（九六九）に起きた安和の変が関係していると思われる。経房の父源高明はかつて左大臣であり人望も能力もあった。ところが安和の変によつて嵌められ大宰府に左遷されてしまう。経房は安和

の変の年に誕生したため、この事件を直接経験したわけではないものの、一家の没落という事実は彼の人生に少なからず影響を与えたはずだ。経房は中閨白家の悲劇を自らの一族の悲劇と重ね合わせていたのではないだろうか。だからこそ、清少納言に道長方への転身を促すのではなく、定子と清少納言を結ぶような働きをしたのだと考える。

『栄花物語』には定子の死後、隆家が大宰府に赴く際、経房に定子の遺児脩子内親王を託したこと(巻第十二「たまのむらぎく」)や、定子の遺児に仕え、敦康親王の葬儀の際にしかるべき指示を出し奉仕したこと(巻第十四「あさみどり」)が書かれている。また、定子没後に隆家の長男良頼と経房の娘が婚姻関係を結んでいることも、経房が道長派一筋というわけではなかったことを示しているだろう。清少納言が里居の居場所を教えたのも、『枕草子』を畳に載せて確信的に出したのも、道長方への転身の意思があったからではなく、経房が信頼するに値する人物であると認めていたからなのである。

また、道長方でありながら定子方にとっても信頼できる経房を選んで託したところに、第一の読者を定子としながらも、さらに広い範囲に読者を設定し、作品を広めようとする意思が働いているように思われる。それは、村上朝の後継者たらんと文化の最先端を目指し続けてきた定子サロンの存在とその試みが、中閨白家凋落によって世間から忘れ去られてしまうことを危惧したからで

あり、回想段には世間の定子への再評価を引き出す意味も含んでいるだろう。そして、定子崩御後はいっそう『枕草子』を世間に広める必要があった。定子崩御後に書かれたと思しき回想段が存在することからも、崩御後は亡き定子への鎮魂のためであると同時に、世間や後世の人の定子に対する「悲劇の後」という固定観念を払拭する目的もあつたと思われる。中閨白家衰退後の定子の人生は、まさに壮絶そのものであつた。死後に怨霊となり出てきても不思議ではないほど、定子に対する道長の態度はひどいものであつたし、実際に道長が中閨白家や定子の怨霊に怯えていたことが、『権記』(長保二年十二月十六日の条)などに見える。しかし、清少納言は『枕草子』に哀れな定子の姿をほとんど記していない。『枕草子』の中の定子は明るく優しく、怨霊とは全く無縁な存在として書かれている。これは歴史的事実に目をつぶり、定子が悲劇の女性ではなかったと言っているのではない。定子の傍に仕えてきた当事者側の立場から、歴史には記されることのない定子の真実として、定子は最後まで素晴らしい理想の主であつたと表明しているのである。『枕草子』という作品が存在しなければ、千年後の読者である私達にとって、定子は政治的に敗れ消えていった数多の後の一人にすぎなかったのだ。

五 「枕」とは何か

跋文第二段落には、『枕草子』誕生のきつかけとなった紙の下賜のやりとりが書かれている。その会話部分を引用する。

(中宮定子) 「これに何を書かまし。上の御前には史記といふ

文をなむ、書かせたまへる」

(清少納言) 「枕にこそは侍らめ」

(中宮定子) 「さは得てよ」

「これに何を書かまし。上の御前には……」という定子の発言は、「一条天皇の『史記』に対抗できるものを書きたいが、何を書いたら良いだろうか」という意味を持つだろう。この発言によって「枕」という提案が導き出されたことから、「史記」と「枕」は不可分の関係にあることがわかる。『史記』に既存の作品で対抗しようとするならば、当時の仮名文学作品の最高峰である『古今和歌集』が最も適当であった。能因本長跋では、下賜のやりとりの際に定子が「古今をや書かまし」と発言していることからそれぞれはうかがえる。「古今をや書かまし」という記述がない三巻本においても、定子が『古今和歌集』を書こうと考えるのは妥当であり、念頭に置いていた可能性は高い。しかし、能因本長跋の「まし」という語が示しているように、書くべき適当なものか思い当

たらず、『古今和歌集』さえもためらっているのである。定子が『古今和歌集』を書写することをためらった理由については、多くの回想段から読み取ることができる。定子が目指した文学的に優れたサロンにおいて重要なのは、知識をその場に応じて工夫して使えることであり、ただ知っているだけのお飾りのような知識ではない。『古今和歌集』を書写するのが最も適当ではあるものの、やはり定子サロンのあり方として、何の工夫もないありきたりな選択はつまらないと考えていたのである。結果的に清少納言の「枕にこそは侍らめ」(能因本長跋では「これ給ひて、枕にしはべらばや」という一言で即座に下賜され、『古今和歌集』ではなく、「枕」なる作品が書かれることになった。

では、「枕」とは何なのか。結論から言うと、清少納言が答えた「枕」は、第一義としては「寝具の枕」を指すと考える。ただし単なる枕ではない。定子方が書くにふさわしい、国風と漢風の世界を兼ね備えた「枕」なのである。初段で和漢の融合という方法がとられていることはここに起因する。定子の「上の御前には史記といふ文をなむ、書かせたまへる」という言葉から「しき(史記↓敷き)たへの枕」という枕詞を想起したとすることは想像に難くない。しかし、『古今和歌集』さえも候補から外した結果の「これに何を書かまし」なのであるから、和歌的な内容である「歌枕」や「枕詞」も定子によってすでに一考され、同様に候補から外されている可能性が高い。つまり和歌だけに拘泥する意識から抜け

出す必要があった。また、清少納言の漢籍の知識を思えば、「しきたへの枕」の「枕」を媒介として、『文選』の「枕経藉書」や『白氏文集』の「枕書眠」を想起したであろうことも容易に想像ができる。清少納言が分厚い紙を枕に喩えたことは、「枕経藉書」と「枕書眠」が書を枕としていることに通じているのである。

清少納言が「枕にこそは侍らめ」と答えたとき、定子にも共通理解として「しきたへの枕」から連想する国風の世界と、「枕経藉書」と「枕書眠」から連想する漢風の世界が想起されたはずだ。和歌だけでなく漢籍の知識も兼ね備え、活かせる環境であることが定子サロンの最大の特徴であったからこそ、そして定子も最も適当な『古今和歌集』を候補から外していたからこそ、清少納言は『史記』に対するものとして国風の古典を書くという固定観念の埒外に出たのである。つまり、『史記』を対としながら、最終的にはその対からも逸脱しているのである。表には寢具の枕にすると言い、その裏には国風世界と漢風世界の両世界を有する、既存のものではない全く新しいものを書きましようかと答えたのだ。前述したように、和漢の世界を有していることこそが定子サロンの特徴であった。つまり、清少納言が答えた全く新しい作品「枕」は、定子方が書く和漢の世界を有した世界⇨定子サロン文化の書、として誕生したのである。固定観念に縛られず、全く新しい作品をつくるというこの発想は定子に認められ、「さは得てよ」と、作品の内容に関する全てが清少納言に委ねられたのだと考える。

定子は定子サロン文化の結晶である『枕草子』に期待を寄せ執筆を応援していたが、その完成を見る前に第二皇女姪子内親王を出産して崩御してしまう。主家凋落そして定子の死によって『枕草子』は後ろ盾を失うものの、清少納言は道長の脅威となり得た敦康親王にはほとんど触れず、建前として「心よりほかにこそ漏り出でにけれ」という立場を主張し、経房を通して世間に流布させるなど、戦略的に『枕草子』を生存させた。『古今和歌集』仮名序は、「たとひ時移り事去り、樂しび悲しびゆきかふとも、この歌の文字あるをや。……歌のさまを知り、ことの心を得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、古を仰ぎて今を恋ひざらめか^{（巻出）}」という文で締めくくられている。まさにこのように文化の最先端を目指した定子サロンの文化を書きとどめ、人の心に遺し続けることこそが、『枕草子』に込められた願いであったのである。

六 おわりに

『枕草子』は作品を通して逸脱の姿勢を貫いている。それは単なる伝統の否定ではない。文化の旗手として新たな価値を創造する定子サロン文化の挑戦の姿勢である。定子サロンにとって越えるべき大きな壁は、『古今和歌集』によって絶対化されていた美

意識や価値観であった。その最たる例が春の花(桜)である。『枕草子』は初段冒頭で、春と言えは花という絶対性を崩し、「春はあけぼの」とすることで、伝統を受け継ぎつつも、それに盲従しない姿勢を示した。また、定子サロンの文化とともに『枕草子』に記しとどめられているのが、定子の素晴らしさである。『枕草子』は定子の理想性を死守している。二三四段「御乳母の大輔の命婦、日向へくだるに」は、定子の不遇を記さない『枕草子』の性格に反し、悲哀に満ちた章段である。定子の乳母が中閨白家の将来を見限り、定子を見捨てて去っていく。そのようなときでも、定子は乳母を非難したりはしなかった。それどころか、乳母が旅立つ日向を「あかねさす日」と表現する思いやりを見せた。この章段は、定子は誰のことも怨んではいなかったのだと主張し、その理想性を強調している。道長の台頭と圧迫によってあらゆるものを奪われても少しも失われることのない定子の素晴らしさは、回想段において一貫しているのである。

回想段には定子崩御後と思われる記述があることから、定子没後も作品を書き足していたことがわかる。しかし、書かれたものはあくまでも定子生前の出来事であり、それ以外のことは一切記さず沈黙している。この沈黙に、『枕草子』の評判と定子の理想性に傷をつけまいとする思いが読み取れるのではないだろうか。清少納言の『枕草子』にかける思いによって、志半ばで潰えようとしていた定子サロン文化は潰えることなく、定子は明るく知的

で思いやりに満ちた理想の主として、『枕草子』のなかで輝き続けているのである。

注1 萩谷朴『枕草子解環』(同朋舎出版、一九八一年)に拠った。

注2 日向一雅『枕草子』の聖代観の方法——「陰陽の變理」と天曆聖代観を媒介にして——(『源氏物語の準拠と話型』至文堂、一九九九年)に詳しい。

注3 中島和歌子『枕草子』初段「春は曙」の段をめぐる——和漢の融合と、紫の雲の象徴性——(『むらさき』四一、二〇〇四年十二月)

注4 藤本宗利「空白への視点——「春は曙」の読みをめぐる——(『むらさき』二一、一九八四年七月)『枕草子研究』(風間書房、二〇〇二年)は、初段の表現は和歌の伝統に支えられた美意識の硬直性への烈しい挑発であり、通念的素材についてあえて沈黙することで逆に鮮明な心象を読者にもたらずと説く。

注5 初段の聖代観について、注2の日向論文は、「一条朝を聖代とする構成」とし、注3の中島論文は、「一条天皇・定子皇后揃つての聖代」としている。

注6 『枕草子』以前では、醍醐朝の飛香舎藤花宴の歌とされる藤原敏行の「藤の花風吹かぬ世は紫の雲立ち去らぬ所とぞ見

る」(『秋風和歌集』春下122)がある。注3中島論文に詳しい。
注7 注1に同じ。

注8 三田村雅子「枕草子類聚章段の性格——「名」と「名」を背くもの——」(『平安朝文学研究』、一九八三年十月)／『枕草子 表現の論理』(有精堂出版、一九九五年)は、物の日常的イメーজと実態のずれの瞬間を捉えてその差異性を対象化していくことが「もの」型章段の興味の主眼となっていると説く。

注9 車田直美「『尋郭公』考——『枕草子』「五月の御精進のほど」の段をめぐって——」(『中古文学』五四、一九九四年十一月)に詳しい。

注10 ジェンダー越境に関して、小森潔「〈性差〉を越えて——清少納言と中宮定子」(『枕草子 逸脱のまなざし』笠間書院、一九九八年)は、漢籍の価値評価や「男性性」文化という価値観すらもずらしていくところに『枕草子』の逸脱への執着が見えると説く。

注11 二五九段は、一三七段「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来」に見える里居と同時期と考える。一三七段には、定子が里居中の清少納言に「言はで思ふぞ」と書かれた山吹の花びらを包んだ文を送り出仕を求め、清少納言はその後しばらくして再出仕したことが書かれている。

注12 注1に同じ。

注13 源経房に関しては、久保木秀夫「枕草子における源経房」(『語文』九八、一九九七年六月)に詳しい。

注14 本文は『新編日本古典文学全集』に拠る。
〈おざわなえ／二〇二〇年 日本語・日本文学科卒〉